

# 犬消化器型リンパ腫に対する化学療法(CCNU)の治療効果

山下傑夫(腫瘍科 勤務医)

## はじめに

リンパ腫は、犬でもっとも一般的な悪性腫瘍性疾患であり、犬の消化器型リンパ腫は、多中心型リンパ腫について良く遭遇する疾患です。消化器型リンパ腫は、胃、小腸、大腸といった消化管、また腸間膜リンパ節や肝臓など消化器系臓器を原発としています。犬のリンパ腫に対する化学療法は、多剤併用療法が一般的ですが、消化器型リンパ腫での奏功率は低く長期寛解が得られないことが多く、なかでもT細胞型はB細胞型よりも予後が悪いことが知られていま

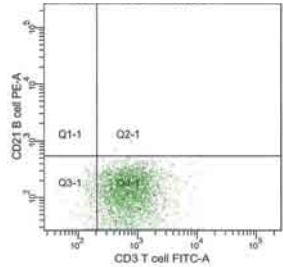
### 犬リンパ腫

- ・多中心型リンパ腫 (リンパ腫全体の約80%)
- ・消化器型リンパ腫 (リンパ腫全体の約7%)
- 免疫型で分類すると、
  - ① B細胞型 (消化器型リンパ腫全体の約12%)
  - ② T細胞型(78%)
  - ③ nonT/nonB細胞型(10%)

す。T細胞型には一般的な治療であるCHOP(シクロホスファミド・ドキシソルピシン・ビンクリスチン・プレドニゾン)を基本とした多剤併用化学療法が奏功しにくいと報告されています。

今回、画像検査および細胞診により消化器型ハイグレードリンパ腫と診断され、フローサイトメトリー検査にてT細胞系あるいはnon T non B細胞系に分類された15症例の犬に対し、CCNU(ロムスチン、日本未発売)による化学療法を実施しました。

フローサイトメトリー検査



## 症例

- 犬種はゴールデンレトリバー3例、シーズー3例、柴犬3例、雑種3例、その他犬種3例で、平均年齢8歳(3-12歳)、性別は雄9例(去勢雄3例)、雌6例(避妊雌4例)平均体重8.7kg(4.0-26.7kg)でした。
- 臨床徴候として、嘔吐、下痢、血便と消化器症状が多くの症例で認められていました。
- 発生部位は、小腸あるいは大腸の消化管に病変が確認されたものが11例、肝臓や腸間膜リンパ節が主病変として確認されたものが4例でした。
- ステージⅢは1例、Ⅳは3例、Ⅴは9例(未分類2例)であり、サブステージはすべてbでした。表面マーカー検索ではT細胞系が11例であり、non T non B 細胞系が4例でした。

### リンパ腫の病期の特徴

- ・ステージ分類
  - Ⅰ 単独のリンパ節
  - Ⅱ 複数領域のリンパ節
  - Ⅲ 全身のリンパ節
  - Ⅳ 肝臓・脾臓を含む
  - Ⅴ 骨髄・血液・非リンパ節器官を含む
- ・サブステージ
  - a 臨床兆候が見られない
  - b 明らかな臨床兆候が見られる

## 治療

CCNUの初回平均投与量は60mg/m<sup>2</sup>(41-73mg/m<sup>2</sup>)で、投与間隔は3週間を基本としました。有害反応(好中球減少、肝酵素上昇)を観察しながら2回目以降の投与量を調節しまし

た。全例でプレドニゾン、12例でL-アスパラギナーゼを併用しました。

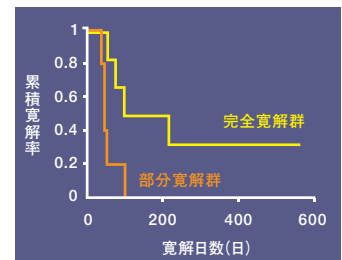
## 治療成績

完全寛解(がんの徴候がすべて消失)は6例、部分寛解(腫瘍の大きさが減少)は6例であり治療効果(反応率)は80%と多剤併用化学療法(文献\*)よりも良好な治療成績を得ることができました。全体の中央生存期間は52日(10-549日+)でしたが、

完全寛解に至った6例の寛解期間の中央値は152日間(48-549日+)であり、うち2例は1年以上経過した現在も完全寛解が維持されております。

報告者(年)	症例数(T/B)	治療	発効率(%)		生存期間中央値(日)		
			全体	T細胞(CR率)	全体	T細胞型	nonTnonB細胞型
Rassnickら(2009)	18(10/6)	多剤併用(VELCAP-SC)	56	30(30)	77	22(0-103)	-
本研究	15(11/-)	CCNU(pre±L-ASP)	80	90(45)	52	82(39-549+)	29(10-130)

参考文献(\*)Rassnickら 2009



## ご紹介いただく場合

今回の成績より、CCNUによる化学療法は、犬の消化器型T細胞性/non T non B細胞性リンパ腫に対する有効なひとつの手段として用いられることが示唆されました。本治療は必

ずしも第一選択治療法ではありませんが、他の治療法も考慮しながら治療方針をたてていきます。